
すぎる手

沖川 英子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すがる手

【Nコード】
N7812R

【作者名】
沖川 英子

【あらすじ】
夜道に行く若者が暗闇の中で出会ったのは、温かな手。
すがりつく手はまた、誰かの救いの手ともなる。

2000文字未満の短編です。

(前書き)

この作品は、【マイクロスコピック】(sleepdog様)主催、
「希望の超短編」企画に寄稿したものです。

若者は夜道を行く。

眼前に己の手を伸ばしても分からぬような墨色の闇の中、ひたひたと道を行く。

分厚い雲が空を覆い、月はおるか星の明りすらも見えぬ。唯一の光源は右手に持った手燭のみで、それすらも折からの風に吹かれて頼りなく揺らめいている。

ただっ広い草原の中を走るこの道は小石の目立つ悪路である。万が一転びでもすれば、身は痛まずとも火が消える。若者は風の音に怯え、草原のざわめきにおののき、彼を包み込む闇の深さに震えながらひたすらに道を行く。

じじ、と火が身じろぐ。

ごう、と殴られるような衝撃が走り、若者は思わず顔を背ける。同時に目の前が真っ暗になる。慌てて手元を見るが既に遅い。一瞬の暴風の前に、小さな火ははかなくも消え去っていた。

若者は立ちつくす。総身にどつと冷たい汗が噴き出す。闇が急に彼の背にのしかかってくる。その重さに押しつぶされそうになる。

若者はしゃにむに歩きだす。小石に躓きそうになるが構ってはいられぬ。立ち止まってはいられぬ。一瞬でも足を止めれば、闇の中から何者かが現れ彼をとり殺すような気がした。

と、行く手に何者かがいるような気配がした。歩を緩め、己の足音の合間の静寂に耳を済ませると、確かに別の足音が聞こえる。さではもののけかと総毛だったが、考えてみればもののけが人間のようにさっさと足音を立てて歩くはずもない。若者の足が速かったのか、足音は次第に近くなり、ついには幾ばくも離れてはいないだろうと思われるほどになった。

もしや良からぬ者かも知れぬ。しかし、闇の中に一人でいるよりはましである。心細い彼はえい、ままよ、と声をかけた。

「もうし」

足音がぴたりと止まる。若者も思わず足を止める。闇の中に、触れて分かるほどの緊張が走る。もしや声をかける相手を間違えたかと、彼は身をすくめる。

警戒と恐怖の沈黙の中、闇が声を発した。

「どなたかな」

意外にも落ち着いたその声は人の男の物と思われた。この応えに若者はふつと肩の力を抜いた。

「もうし、驚かせて済まぬ」

闇の中から若者は相手に必死に語りかける。この暗闇に難儀している、良ければ道連れになつてはくれまいかと。相手は構わぬと穏やかに応え、探りながらも若者の手に触れた。若者はほとんどすがるようにしてその手を掴んだ。相手の手は若者とは違って震えてもいなければ汗に湿つてもおらず、大きく温かだった。

相手の落ち着いた様子に、若者の心は徐々に凪いでいった。同時に、男二人が手を繋いでいるこの状況がどうにも滑稽に感じられ、思わずふつと笑ってしまった。そして、笑うだけの余裕ができたことに肚の底から驚いた。相手もまた、ふつふと穏やかに笑っているようだった。

遠い空の端が朧に明るくなり、闇が徐々に薄まる。やがて分厚い雲の切れ間からわずかな朱色が覗く。気味悪く頬をなでていた夜風は、草いきれを微かに含んで爽やかに香る朝風に代わり、胸中の不安を吹き飛ばした。その頃になつてようやく、若者は相手が自分とさして変わらぬ年頃の若者であったことに気が付いた。

行く手の道は二股に分かれており各々の進む道は違う。別れ際に、若者は道連れの男に向かい深々と頭を下げた。

「本当に助かった。誠にかたじけない」

腰まで頭を下げる若者に、相手はいやいやと首を振る。

「たいしたことはしていない」

「いや、あなたがいなければ、私は道の真ん中で立ち往生し、恐ろ

しさのあまりについには気を遣っていたかもしれない。あなたは、手燭にも勝るともし火だった」

「それを言うなら、私の方こそ」

若者は思わず頭を上げた。怪訝な顔をして見つめる先で、相手は声の通りの穏やかな顔でにっこりと笑った。

「あなたにすがられたからこそ、私は落ち着くことができた。己を保つことができたのだ。そうでなければ、あの暗闇の中で恐れのみりに己を失くし、やはり気を遣っていたかもしれない。あなたのすぎる手こそ、私にとっては救いだったのだ」

呆気にとられる若者の前で、相手はさっと一礼すると身を翻して歩いて行った。

振り返ることなく遠のく後ろ姿をしばし見送って、若者は踵を返し己の道を歩き始めた。

曙光がその姿をまばゆく照らしだしていた。

(後書き)

誰かのともし火になることを願って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7812r/>

すぐる手

2011年10月7日13時12分発行